

「かなざわ幼児教育みちしるべ」活用に関する研究

代表者名 ● 開仁志(人間科学部こども学科・教授)、川並利治(人間科学部こども学科・教授)、芥川元喜(人間科学部こども学科・准教授)

はじめに

保護者、地域社会、小学校、関係機関等と保育について理解が共有されることが重要とされている背景から、石川県金沢市では「かなざわ幼児教育みちしるべ」を策定した。しかし「かなざわ幼児教育みちしるべ」の策定に留まり、活用までには至っていなかったことから、本研究では「かなざわ幼児教育みちしるべ」の活用方法の整理、さらに実際に活用した結果について考察を試みる。

活動内容

- 1「かなざわ幼児教育みちしるべ」活用の手引き作成
- 2「みちしるべ」活用、実践結果の分析・考察
 - (1)「みちしるべ」の概要・活用に関する研修会
 - (2)「みちしるべ」活用に関するアンケート調査
 - (3)授業での活用「教育方法論」「教職実践演習」
 - (4)福祉の視点から「みちしるべ」を活用したい点

成果、結果の考察

＜活用方法の整理について＞

①保育者の自己評価への活用、②保護者への活用、③地域への活用、④小学校との接続への活用に整理された。また、「みちしるべ活用の手引き」と「みちしるべ活用シート」を作成したことで、子どもの姿を可視化し、共有する一助となったと考える。

＜活用結果の考察＞

「3つの伸びゆく力」や「健康な心と体」に関する項目ごとの記述が明確でシンプルであり、気軽に自由に表現しやすいこと、写真やイラスト・エピソード等で可視化することで保育者・保護者・小学校教員等が子どもの姿を共有しやすいことが明らかになった。一方で、「みちしるべ」の趣旨や活用シートの書き方における共通理解の必要性、新しい書類が増えることへの負担感の軽減に対する意見が見られた。また、作成しただけではなく、振り返り(リフレクション)や語り合い(カンファレンス)が重要であることが示唆された。さらに、養成教育の段階から、子どもを送り出す側と受け入れる側、立場

の異なる両方がみちしるべを活用して、同じ視点に立って「子ども」について語り合うことを経験し、理解し、実感できる経験が重要であることも明らかになった。

今後の課題、展望

従来、教育施設や保育施設の職員の捉えた子どもの姿の共通理解に留まりがちだったのではないかと。子ども・保護者・地域の方の手紙については、育ち・学びの主体者である子どもの意見、子育ての主体者である保護者の意見、関わる地域の方・関係機関等の意見を表明する貴重な機会となるものとして設けている。保育・教育者が子どもの意見をアドボケート(代弁)し、子どもの育ちと子育てに優しい世界をつくっていくことが求められる。そのために、狭い世界に留まるのではなく、施設種別や立場等の垣根を越えて、子どもを真ん中にして、縦(乳幼児期から児童期へ、保幼小連携)、横(保育所・幼稚園・認定こども園の連携、園と保護者の連携)、ななめ(園、関係機関、地域住民等全ての連携)の幅広く立体的で継続的なつながりが、一層重要となってこよう。



みちしるべ活用シート

※本研究は「かなざわ幼児教育公開研究会」で発表した内容の一部を加筆、修正したものである。また、金沢市の「みちしるべ」活用研究事業の一環として行われたものである。